

2008年11月20日実施

2009年度 特技推薦入試[スポーツ部門]

小論文問題

- ① この冊子は、特技推薦入試[スポーツ部門]の小論文試験の問題です。答案は、所定の原稿用紙に記入してください。
- ② 試験監督の試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- ③ 原稿用紙には、受験番号・志望学科・氏名を必ず記入してください。
- ④ 原稿用紙は持ち帰ってはいけません。問題冊子は持ち帰ってください。

問. 次の文を読んで、パラリンピックについて、障害者スポーツへの理解を深めてもらうために、底辺の拡大を優先すべきか、トップアスリートが高いレベルを競う場であるべきか、あなたの考えを800字以内で述べなさい。

大久保春美氏(北京パラリンピック日本選手団長)

障害者スポーツの発展には、まずは底辺の拡大が不可欠だ。98年に長野冬季パラリンピックが開かれて以降、国内には障害者スポーツには追い風が吹いていると感じている。

確かにパラリンピックと五輪との一体化が進んでいるが、それはまだ始まったばかりだ。今後、選手がスポーツで生計が立てられるかは不透明だ。頂点を高くするためには、広い土台を築くのが肝要だ。そのためには特に自治体の「お墨付き」を得て、障害者がスポーツに親しむ環境を整えていくことが重要と考える。……

確かに国内でも車いすテニスをはじめ一部の競技で、プロ化しているアスリートも存在する。しかし、彼らの収入は、遠征費や練習のための費用を賄えるくらい。生活にゆとりを持てるほどではないのが実情だ。

環境整備は新たな才能の発掘にもつながり、ひいては競技力の向上にも結びつく。

高橋明氏(大阪市障害者スポーツセンタースポーツ課長)

スポーツを広めるにはヒーローの存在が大事だ。障害者スポーツの普及に底辺の拡大が不可欠なことは否定しない。だが、トップ選手が集い、「リハビリテーションの成果を競う場」から「競技の場」となったパラリンピックでは、大会を通じて障害者スポーツや障害者への理解を広めるためにも「ヒーロー」の誕生が求められている。……

数年前から大阪で車いすバスケットボールの国際大会を運営し、必ず地元の子供たちが見にくるよう努力している。障害への理解は見ることから始まるからだ。トップクラスの戦いを目の前で見てもらうことで、まずは「格好いい」と興味を持ってもらうだけでいい。そう感じることから「なぜ、あの選手は車いす生活になったのだろう」と疑問を持ち、そこから障害者への障害への理解が深まることを期待しているからだ。

だからこそ関心を持ってもらえる「強い選手」の育成が必要だ。

(「毎日新聞」2008年9月7日付)